

武蔵野日曜聖書講筈

童心

——マタイ伝第18章1～16節——

1987年9月20日

小池辰雄

童心に帰れ 童心に帰れ 一即全、全即一 自然・靈然・神然 無の貧しさ 単純で崇高 キ
リストと「」にならぬ 「……」 「……」

【マタイ18】

1 そのとき弟子たち、イエスに來りて言う『しからば天国にて大なるは誰か』
2 イエス幼児を呼び、彼らの中に置いて言い給う、3 まことに汝らに告ぐ、もし汝ら翻りて幼児の如くならずば、天国に入るを得じ。4 されば誰にても此の幼児のごとく己を卑うする者は、これ天国にて大なる者なり。5 また我が名のために、斯のごとき一人の幼児を受くる者は、我を受くるなり。6 然れど我を信する此の小さき者の一人を躓かする者は、寧ろ大なる礮臼を頸に懸けられ、海の深処に沈められんかた益なり。7 この世は躓物あるによりて禍害なるかな。躓物は必ず來らん、されど躓物を來らす人は禍害なるかな。8 もし汝の手、または足、なんじを躓かせば、切りて棄てよ。不具または蹇跛にて生命に入るは、両手・両足ありて永遠の火に投げ入れらるるよりも勝るなり。9 もし汝の眼、なんじを躓かせば抜きて棄てよ。片眼にて生命に入るは、両眼ありて火のゲヘナに投げ入れらるるよりも勝るなり。10 汝ら慎みて此の小さき者の一人をも侮るな。我なんじらに告ぐ、彼らの御使たちは天にありて、天にいます我が父の御顔を常に見るなり。12 汝等いかに思うか、百匹の羊を有てる人あらんに、若しその一匹まよわば、九十九匹を山に遺しおき、往きて迷えるものを尋ねぬか。13 もし之を見出さば、誠に汝らに告ぐ、迷わぬ九十九匹に勝りて此の一匹を喜ばん。14 斯のごとく此の小さき者の一人の亡ぶるは、天にいます汝らの父の御意にあらず。

15 もし汝の兄弟、罪を犯さば、往きてただ彼とのみ、相對して諫めよ。もし聴かば其の兄弟を得たるなり。16 もし聴かずば一人・二人を伴い往け、これ二三の証人の口に由りて、凡ての事の慥められん為なり。



● 童心に帰れ

「童心」という、一番単純なところに戻ったわけです。キリストはこの幼児において、「これを助けた者は我を助けたのだ。これを侮る者は我を侮る者だ」と。私たちもまた、幼子においてキリストの姿を見るわけです。

私はドイツ文学ではゲーテが一番好きです。何と言っても、ドイツではゲーテは最大の人です。そのゲーテが非常にやはり、童心をもっています。彼の書いたものをみるとわかる。また、そういう童心がないと、複雑怪奇だったら、素晴らしい詩もできない。童心というのは、分裂のない心のこと、全的だということです。ゲーテが好きなのは「ガンツハイト」という言葉です。「ガンツ」というのは「全く」という字です。ひっくりかえって全的なんです。福音も、受けとり方が全的でなければダメです。童心をもつて受けとらないと、

「これがどうだこうだ」

といって詮索しているうちはその世界に入れない。そのまま鵜呑みにしてしまわないとね。

子どもは本当に単純でしょ。保育園、幼稚園の子どもたちを見ても。小学校に入ると、一、二年あたりはいいけれども、もう二年あたりから少しかしくなってくる。

「二つ子のたましい百までも」

というけれども、本当にそうですね。乳児でもそうだ。おっぱいを呑んでいるような子どもの顔を見ると、本当に何ともいえない天国だ。どこの国の子どもでも同じことです。大人だよ、国境をつくるのは。すぐ境をつくる。私の讃美歌にもあるでしょ。

「幼児らにも国境なし」

と。大自然にも境界線はない。子どもの世界にも境界線がない。全世界の子どもが本当は平和の徴なんだ。平和でなかったなら、子どもに帰ればいい。だから、「立ち帰れ」ということは、神さまに帰ることと同時に、子どもに帰れということだ。「童心に帰れ」ということ。

「汝ら、悔改めよ」

なんて言わないで、

「汝ら、子どもになれ」

というわけです。

ドイツ語に「キンディッシュ」という言葉と「キントリッヒ」という言葉がある。「キンディッシュ」というのは「子どもっぽい」ということで、これは必ずしもよい意味ではない。「キントリッヒ」というのは正に、幼児のよさを言った「子どもらしい」ということになる。また、ドイツ語の「キント」という言葉は、親からいえば、それが何歳であろうとみんな「キント」「子ども」なんです。

● 一即全、全即一

要するに、キリストは自分のことを「人の子」と仰っている。キリストだけは本当の神童だ。



私は自分のことをこの頃、「天童」と書く。「天鐘」の金編はやめたんだ。お金は要らない(笑)。やはり、80歳もこえると、正直、だんだん童心的になるよ。さつき、N君が

「先生は簡単になった」

と言うが、本当に簡単なんだ。しかし、非常に単純なものが、また非常に多様性をもつことができる。中心は本当に単純なだけども。「一」でなければダメなんです。中心は無。どつちでも同じようなものです。

「我と父とは一つなり」

でしょ。一つの世界です。第9巻(小池辰雄著作集『感想と紀行』)に「一の宗教」と書いたでしょ。非常に「個」を尊ぶんです。いわゆる教会はあまりそういうことを言わない。コイノニアとか何とかばかり言っている。また、無教会はいわゆる個人主義になってしまって、もちろん、これはまたいかん。どつちもうまくないけれども。一、即多、多、即一。あるいは、一、即全、全、即一という、そういう境地です。

この場合の「全」は全体主義の全ではないですよ。我々は多様性です。みなそれぞれでいてください。それぞれの個性をもった多様性でありながら、これが一である。これはもう聖霊でなくては。聖霊がなければ、この「一」は成り立たない。

「信仰箇条で一つになりましょう」

なんて、そんなのはダメなんです。御霊があれば、何も作為がなくて、おのずから一の世界になる。この御霊の自ずからの一は、

「賜物はさまざまだ」

とパウロが言っているでしょ、その通りです。パウロは本当にそれを捕まえている。そういう世界です。あなた方、パウロもよく読んでくださいよ。福音書の世界は、ある意味においてパトス(情)の世界だ。パウロはなかなかロゴス(知)をもっている。けれども、パウロはそれが渾然としている。

●自然・霊然・神然

6 然れど我を信ずる此の小さき者の一人を躓かする者は、寧ろ大なる礮臼を頸に懸けられ、海の深処に沈められんかた益なり。

と。えらいことを言うよ、キリストは。

「そんなやつはとんでもない野郎だ。幼児を侮る者は神さまを侮ることになる。みんな、守り天使がちゃんと見てるぞ」

と。ゲーテが童心をもっている。ダンテも童心をもっています。もう、超一流の人はみんな根底には童心がある。ベートーヴェンの音楽も、あのもの凄い音楽が、その元は何かと言うと、「フォルクスリート」「民謡」だと、ある人が書いている。私もそうだと思う。文学は、劇文学が一番素晴らしいけれども、文学の始めにして終りはお伽話だと言う。「メルヘン」



です。これはケールさんが言っている。釣りの始めと終りは鮒釣^{ふな}りだと言う。みんな単純なところからまた単純に戻るんです。

まあ、青年諸君は青年らしくやってください。それぞれの時期というのは、それぞれらしくなければダメだ。ただ、らしくあるんだけれども、いくつになっても、その根底にはやはり童心^{こころ}がなければダメだ。そういう童心のない人は、複雑怪奇な人は、あまり信用しにくいよ、本当のところ。何を思っているかわけが分からん。

そういう童心ということ。キリストだけは神童^{かみどう}です。私は、キリストだけは、キリストの在り方は神然^{かみじ}と使うんです。

「自然・靈然・神然」

と言う。神然はキリストだけにしか使えない。我々には使えない。我々は御霊における靈然だ、靈然の世界です。この宇宙は自然だ。自然・靈然・神然という。この神然のひとに私たちはぶつかっているんだから、やりきれないわけですよ。

「降参しないで福音の世界に入れるか」

と言うんだ。

私は、この壇上に立つときには、空っぽなんです。空っぽでなければ立てないんです。そうすると、上から力がくるからね。

「今日は何を語つてやろうかな」

なんて考えていたらダメなんです。昔は、私はちゃんと原稿をつくって、メモを見ながらしゃべっていた。ダメだよ、そんなのは。無教会時代はそうだった。

内村先生は、ちゃんと原稿を用意して、それを読むか語るかというようなことでやっている。しょっちゅう原稿なんです。案外、気が小さい。藤井先生がそう言っていたよ、

「内村先生は案外、気が小さい」

と。毎月出す雑誌は、一、二、三か月先のことまでちゃんと書いてあるんだってさ。藤井先生は、「その時にならなければ、土壇場にならなければ書かない」

という。

「私はそうなんだ」

と藤井先生は言っていた。藤井先生はやはり、乗っかってものをする人だった。詩人だから。しかし、内村先生は決してただ論理の人ではない。本当に断言命法的な書き方をする。内村先生の文章は、少し字あまりで、余ったところで切ったっていいんだってさ。トカゲのようにピンピンしている。どこで切っても、文章は生きているんだって。それはそうでしょう。断言的な言葉の連続だから。

「こうならば、こう」

なんていう言い方はあまりしない。文章の性格がそうです。ああいう人たちの特色はみんな、その瞬間に全おのれを投じている。だから、そういう文章が書けるんです。



昨日言ったことと、今日言ったことが矛盾して構わない。昨日は昨日において真理なんです。今日は今日において真理なんです。それを同じ平面においたらダメです。それが本当に生きた文章なんです。そこを辻褄つじつまを合わせたら、力がなくなる。だから、この頃のカトリックとプロテスタントの聖書「共同訳」なんて、あんなのは私は見る気がしない。カトリックはカトリックで、プロテスタントはプロテスタントでいいんだよ、それぞれの特色で。そんなところを人間的に整える必要はひとつもない。そんな外側の文章ではないんだから。その奥から響いてくるところの響きが本当にそこに盛られているかだけが大事なんで、整ったものは造り花だ。この花瓶の花はみんな整っていないんだよ。華道なんていうのも、ザッザッと生けた方が——あまり恰好をつけてしまうと、人工的な恰好になってしまうから——本当に自然に咲いている姿を見て、そのように生け花をしたら、私は一番いいと思う。いろいろ恰好をつけてしまうからね(笑)。私は恰好やポーズというのが嫌いなんだよ。

●無の貧しさ

3 まことに汝らに告ぐ、もし汝らひるがえ翻りておさなじ幼児の如くならずば、天国に入るを得じ。

この「翻りて」というのが大事なんです。「翻りて」というのは「立ち帰りて」なんです。
ひるがえ翻りておさなじ幼児の如くならずば、天国には入れない
 と言う。

「翻りて童心をもたずば」

ということですよ。それでは、その童心はどうして来るか。

「無の貧しさ」

へ来るんです。幼児というのは何も反省しない。あるがまま。幼児というのは自分を顧みてない。あるがままに全存在を出しているでしょ。泣きたいときには泣いている。笑いたいときは笑う。しがみつきたいときにはしがみついている。ああいうように、反省のない、内と外が一つの世界。そういう分裂のない、全的な姿。これはキリストがそうだった。神に在って、父に在って、キリストは本当に父の懐に入っているようなひとで、彼は童心そのものをもっておられた。だから、「父よ」なんだよな。それは「母よ」だって構わない。キリストが「父よ」と言うときには、「母よ」もいつしよに入っているかも知れない。けれども、この場合の「父よ」というのは、「神さま」ということの代名詞みたいなものですから。そのように、分裂のない一の、そして極まる場所は無の世界。これが、キリストの十字架が賜り、そして聖霊が来ているところ。やはり、

「十字架・聖霊」

この姿が童心の姿に結局、なるんだ。表現できないもの(聖霊)は、丸(○)で書くよりかしようがない。この表現できない丸は、どうしてできたかという、真ん中に十字架(十)



があるからできた。十字架がなければ、この丸はできない。聖霊は来ない。十字架なしの聖霊なんていうものは、私はそんなものは信用しない。旧約の世界で「聖き御霊」という言葉が二、三回出てきます。これは新約で言う聖霊とはちがう。これは「エホバの霊」で結構です。何も悪くはない。悪くはないけれども、我々罪びとにとっては、これはキリストの十字架を経なければ。だから、

「預言者たちもこの神の子らにはかなわない」

ということをキリストは言っている。福音を受けた神の子らには預言者もかなわない。

「私が与える福音はその世界だ」

と、キリストは言っておられるわけです。

●単純で崇高

まあ、大変なひとだよな、福音書を読むと。驚嘆、驚倒、圧倒されながら読む。電車の中で私は——福音書だけを破りつつ別綴綴であるけれども——それをこうやって見て、もうあとは瞑想していればいい。

単純なものほど強いものはないんですよ。幼児をサタンは誘おうとはしない。だから、幼児を誘拐した犯人というものは完全に死刑囚だね。この頃少し刑が弱すぎる。とんでもない。悪いのがいるね、この頃。あれはどんなに精神異常者であろうと、どんなに酔っぱらいであろうと、これはダメですよ。大人ならば責任をもつ。精神異常者と酔っぱらいの天国だ。冗談じゃない。そういうようなことになったのは自分の責任なんだから。

「環境がそうならした」

と、環境になすりつけるようなことはいかん。いかなる環境であろうと、それと戦っているのが本当の人格者の、一人前の人間の責務なんだから。その戦いは、申し上げているとおり、聖霊がなければ本当の勝利にはならない。だから、皆さんは、十字架・聖霊を賜ったときに本当に、その境地は童心の境地で、キリストの心になっている。

「キリストの心を心とせよ」

とパウロが言ったのは、

「この神童の心を心とせよ」

ということ。それは本当に平和の一番深い世界です。まあ、男性が一番悪いね、男の大人が。これはもう一番悪い。一番、天国に入りにくいです、よほど翻りて童心にならないと。

私の兄貴は本当に単純だった。男らしくて単純でね、頭はもの凄く良かったけれども。しかし、非常にそういうところは、

「シンプルネス、ノーブルネス」

「単純で崇高である」という言葉が彼は好きだった。



●キリストと一つになる

マタイ伝18章の前半は、キリストの言のうちの最も大事なところの一つですから、もう私がどくどくと言うことはない。一番大事なのは3節の、

「よみな翻りて幼児の如くならずば、天国に入るを得じ」

という、この一句です。そして、

¹⁴ か斯のごとく此の小さき者の一人の亡ぶるは、天にいます汝らの父の御意に

あらず。

ということ。「九十九匹と一匹の迷える小羊」のこともそこに出ている。

まあ、福音書というのは大変なものだね。これは人間が考えた文字ではないです、はつきり。これはキリストの力、御霊の智慧による。一つも無駄がない。キリストがどんな顔をしていたか、そんなことは一つも書いてない。もっぱら福音そのものだけ。しかも、非常に人間を全的に霊肉渾然として活かす。甦りの世界もそうでしょ。なにしろ、柩に手を置けば、よみがえナインの若者が甦ってしまった。そういうような驚くべきことです。

今日は、一人びとりがもの凄いの、使命を負った天下一品の存在であるということと、それから、その中心は正に、翻りて童心の世界に入って、キリストと一つになること。このことを中心として学んだわけです。

●「?…」 「!…」

もう一つ、ちよつと言おうかな。ユゴーという、『レ・ミゼラブル』を書いたフランスの大文豪がいる。あの人のお父さんは軍人だった。あのナポレオン三世のときです。ユゴーはナポレオン三世の政策を、けしからんと批判した。そうしたら、追放された。ベルギーのブラッセルへ行ってしまった。それで、しかし、それではいかんと言って、彼が書いた小説がある。これは批判の文章ではない。小説なんだ。凄い小説を書いた。けれども、フランスではこれを出版できないから、ブラッセルの出版会社の社長がこれを読んで驚いた。

「これを読む人はみな涙を流すでしょう。出しますよ」

と言って、出版してくれた。しばらくたって、ユゴーは手紙を書いた。何て書いたか知っているかい、あなた方。こういう手紙を書いた。世界で一番短い手紙を。

「?…」

と。疑問符であとは点々々。この小説は、「人々はどう読んだでしょうか」と。返事は、

「!…」

と。「みんな感嘆してますよ」と。これは世界で一番短い手紙の往復なんです。やはり、ユゴーという人も本当に極まるどころを知っている。もう言葉にならない。この言葉にならない境地が童心の境地です。まあ、『レ・ミゼラブル』は素晴らしいね。聖書の註解書なんかいくつ読むよりも、『レ・ミゼラブル』を読めば、それでたくさんだ。あそこに、人間社



会の一切の面が出ている。これは小説をもってした大批判だね。超批判の世界です。

もう今は、本当にそういう意味において、世界は本当におかしい。日本が一番おかしいのではないかな。マンガ、マンガで。マンガと週刊誌で溢れている。

あなた方はしつかりしてくださいよ。福音の本当に使徒的な次元でもって戦わなければ。これは本当に無手勝流なんだよ。無の世界です。宮本武蔵は両刀を使ったが、あれは本当は一刀から無刀になる。無刀の世界になったら、一番強い。じつと相手をにらんでおしまい。相手は参ってしまふ。剣は持っても持たざる世界です。

それは、キリストの中に自分が入ると、自分の姿がなくなるからね。そういう世界です。

「我を見し者は父を見しなり」

「我を見し者はキリストを見しなり」

と。だから、パウロもペテロも、

「我を見よ」

と言った。この権威は、

「わがうちなるキリストを見よ。キリストと一つになっている私を見なさい」

ということですよ。本当にズレのない世界です。そういうズレのない、ピタリという融合の世界になる。雲を見れば雲となり、花を見れば花となる。いいですか。木を見れば木となる。そういう非常に柔軟な魂にならないとね。

「キリスト教の教えはどうだ」

なんて、そんなことを言っていたら、もうくたびれてしまふよ。

まあ、しかし、学生諸君は勉強はよくしてください。聖書の一流の註解書は御霊の光で見ればわかるから。そうすると、そのうちに註解書なんか要らなくなる。

とにかく、偽りのないものにおいて神の姿を見ていかななくては。一番わるいのは、この偽りの世界なんだ。「いつわり」というのは、いわゆる「うそつき」ということではないよ。「作られた世界」のことです。「偽りのない」とは、内外分裂のない世界です。

人の目とは不思議なもんだね。へんてこなことを考えると、目がおかしくなるしき。悲しいときには、悲しい目つきになるし。うれしいときはうれしい目つきになる。どういふんだらうね、これ。本当に不思議なもんだね。

「目は心の窓だ」

というけれども。心の中がいつわっていると、目もいつわりの姿になる。あの時代劇に出てくる悪者なんていうのは、見られたものではないよな。役者は役者でうまいよ、それは(笑)。話はいろいろなことになってしまった。それでは、このへんでやめます。

